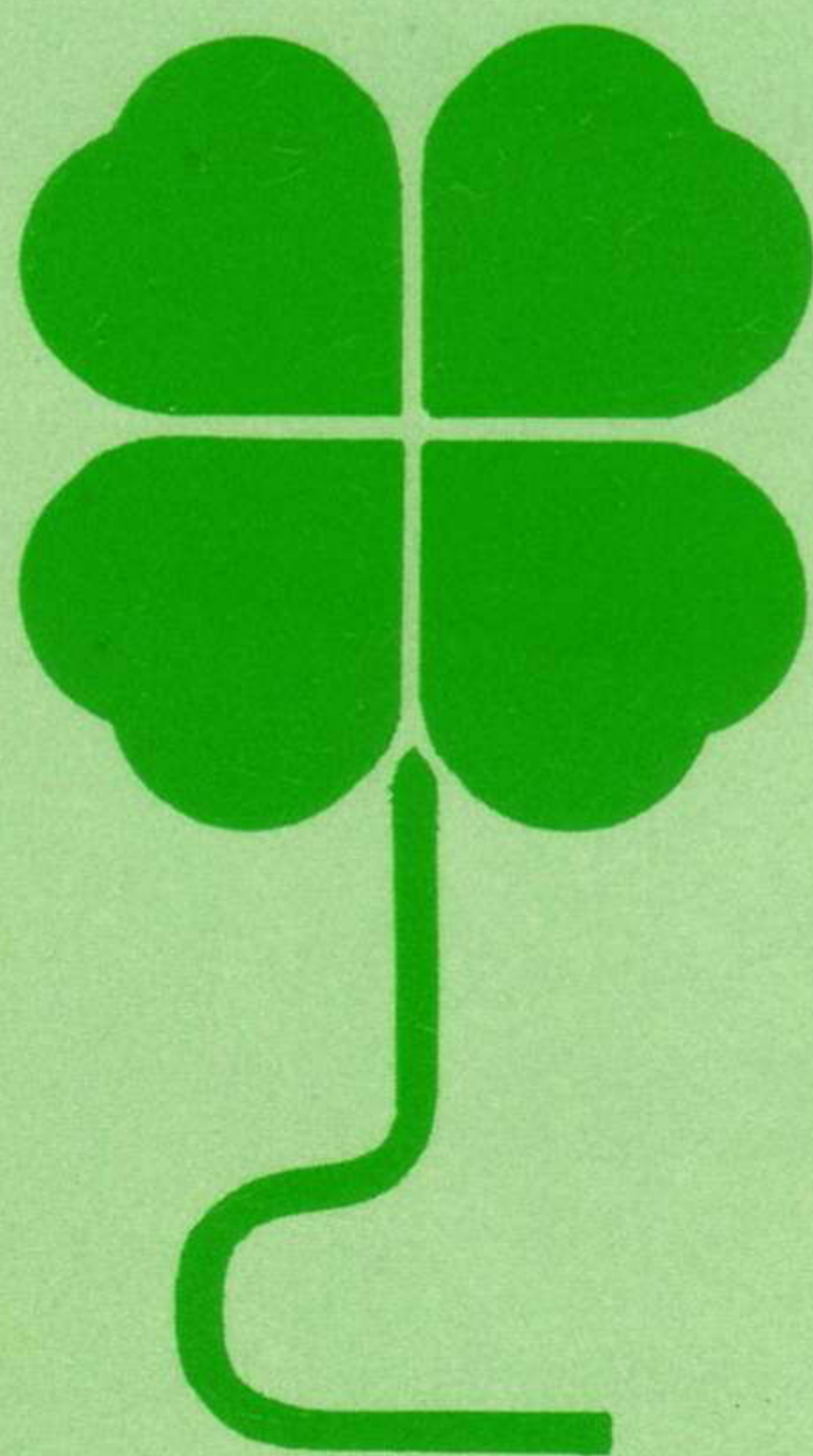


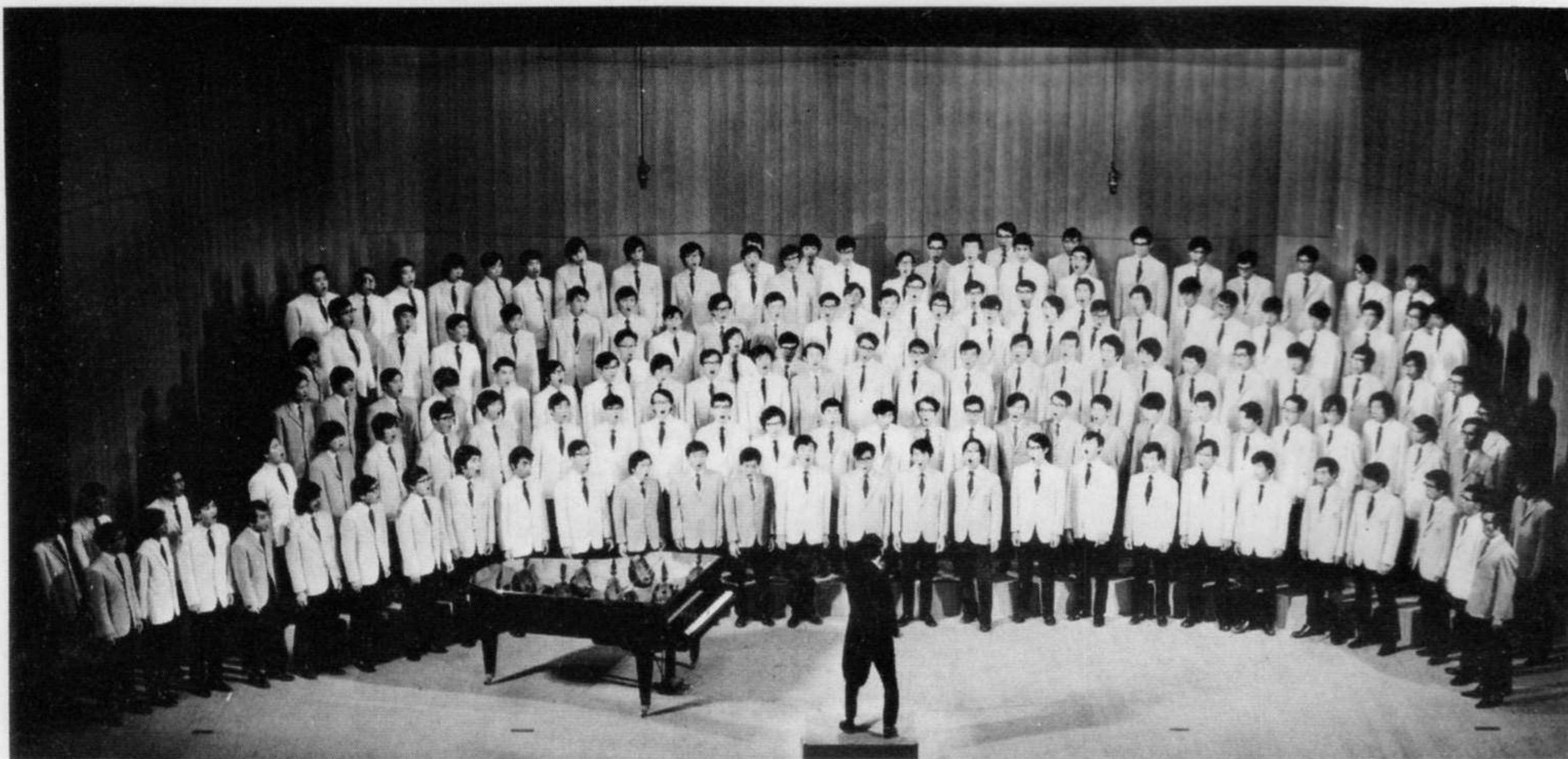
第8回

大阪四大学交歓演奏会



日 時	1973年6月4日
開 演	PM・6:30
場 所	大阪府立青少年会館文化ホール
主 催	大阪四大学合唱連合

第8回大阪四大学交歓演奏会



— ご あ い さ つ —

今宵はお忙しい中を御来場下さいましてありがとうございます。
部員一同心からお礼申し上げます。

皆様の暖かい御支援により、我々大阪四大学の交歓演奏会も今年で8回目を迎えることができました。我々は日頃から、何か新しいもの、未知なものを求めて練習に励んでまいりました。そして、その成果を今日、ここに皆様の前で発揮できることは、我々の最も幸せとするところであります。

どうか最後まで御鑑賞下さいまして、皆様の御意見、御感想をお聞かせ下さいますようお願い申し上げます。

最後にこの演奏会のために御尽力下さいました関係者の方々に深くお礼申し上げます。

部 長 あ い さ つ

＜大阪市立大学グリークラブ部長＞

宮 内 隆 造

合唱自体のもっている硬直性—そこから必然的に生じてくるマンネリズム—から脱しようと、昨年試みたのがあの画期的？とも言えるステージ『愉快的男声合唱』であったのです。

あれから1年後の今宵のステージを御覧になって、昨年の記憶が残っていらっしゃる方にとりましては、2年連続の私達の画期的な試みに驚かれることでありましょう。まず採り上げました曲は17・8世紀のイギリスのマドリガルを中心とした曲であります。それが（男性合唱には一般的な4声部ではなく3声部であるという事、又、ステージに立つ人数が余りに少ないという事です。これは現在私達は合唱団として決して多くない30余名の部員数であります。その少ない部員数から1回生をはずして臨むという試みを敢えて行なったからです。

私達は日々、何かを追求しております。その成果の一部でも今宵のステージを御覧の方に解っていただけたらと思います。

＜大阪外国語大学グリークラブ部長＞

足 立 明 洋

今年も交歓演奏会を持ち、合唱で連なる仲間と共にステージに立つことができるのは、当クラブにとって大きな喜びであります。

さて、新生を迎え新しく歩み出して1ヶ月有余。それは外大グリーに脈々として流れている伝統を受け継ごうと努力した日々でした。しかし残念ながらその伝統—黒人霊歌—にとけこめたとは言えません。霊歌に含まれる黒人奴隷の魂の叫びを表現するには、技術的にまだまだ未熟な我々ですが、叫びそのものは多少なりともつかめたのではないかと思います。——過酷な労働を強いられ暗黒の生活を送っていた黒人奴隷にとってキリスト教説教師が歌った黒人霊歌はどれほどの安らぎと慰めになったであろうか。奴隷達自身が歌った霊歌によりどれほどの勇気と希望が生じたであろうか——彼らの叫びは複雑な現代の世相の中での我々の生に対する真実なる叫びにもつながるのではないのでしょうか。御鑑賞後卒直なる御批判御指導をいただければ幸いに存じます。

＜大阪府立大学グリークラブ部長＞

福 田 進

郷友、大阪四大学が共に一堂に会し、友好の場を持つこと7回。演奏会を迎える度に我々府大グリークラブは、自らの持つ合唱熱、しいては音楽愛の再確認を迫られます。『グリークラブの持つ目的は、その基盤を何処に求めればよいのか。』『部員相互間には利害、打算を超えた何者かが息吹いているのに、あの弾力的な若者の燃焼力が表出しえないクラブとはどのようなものなのか。』このような内的欺瞞を部員数通減の量的課題の下に、どのように解決してゆくといいのか。しかし、このディレンマが解消不可能でないことは我々四大学が共にディスカッションを持ち、その発表の場として今日の集いを開く限り、そして男声合唱の深遠なハーモニーの上に旺盛な探索力が宿っている限り、会場にお集まりの皆様にはお解りになられると信じます。どうかこれからも四大学の交友の場におき、我府大グリークラブの質的、量的発展を暖かく見守って下さらんことをお願いいたします。

＜大阪大学男声合唱団委員長＞

大 海 治

、生命とは何と神秘的なものなのでしょう。

芸術に感動する生命とは一体何ものなのでしょう。

私達が声を合わせ心をつにして唱うとき、そのあわれさ、力強さ、その感激は想像にも余るものがあります。

生命の源である自然のリズム、生命のリズムを芸術、特に音楽は表わしているのではないのでしょうか。

その音楽に親しむことができる私達は何と幸福なのでしょう。

一方、練習は決して楽しいことばかりではなく、苦しみの方が多いかも知れませんが、指揮者のタクトから一つの美しいハーモニー、リズムが生まれた時、生命を感じて感激にひたるのであります。今夜もその感激を団員の一人一人と共にし、又聴いていただく皆様とも一つにとけあって、心ゆくまで唱いたいと思います。

— エ — ル 交 歓 —

PROGRAM

STAGE-I ————— 大阪市立大学グリークラブ

指揮者 宮 内 隆 造

「TEN GLEES, MADRIGALS, AND AIRS」より

1. Happy Are We Met (GLEE)

Anonymous(1764)

人生すべて、めぐり合いと別れである。幸福の肉にめぐり合い、又別れてゆく、そこには暗さはない。ただあっけらかんと人々はめぐり合い別れてゆくのである。

2. The Captive Lover (AIR)

Henry Lawes(1653)

ある女性に対してあこがれているのだが、私は彼女のとりこになっている状態そのままでいたい。私の思いが報われる日がいつかは来るだろうと歌う。

3. How Merrily We Live (MADRIGAL)

Michael Este(1600)

ああ楽しきはこの時、のどかなる春の日よ、群れている羊よ、野に出でて共に遊び憂いを忘れ果てん。リズムカルな楽しい曲です。
各パートの輪唱が聞きどころ。

4. We Be Soldiers Three (AIR)

Freeman(1614)

戦いに敗れて一文もない兵士が3人、仲間をよび酒を飲み酔いつぶれるという悲しい唄です。マイナーの和音がとてもきれいです。

5. Turn, Amarillis, To Thy Swain (MADRIGAL)

Thomas Brewer(1667)

アマリリスというのは田舎の娘の名前で、その恋人が娘に向って歌う多少おどけた恋の唄なのです。のどかな英国の16～20世紀の田園風景の中で歌われたのでしょう。

(グリークラブ) という名称は現在では大学での男声合唱団に用いられています。しかし(グリークラブ) はイギリスで18世紀ごろいろんな音楽をするために集まった人々のクラブです。
以上の曲はそのような場で歌われた曲です。

STAGE-II ————— 大阪外国語大学グリークラブ

指揮者 堀 田 光 行

1. The Battle of Jericho
2. Swing Low Sweet Chariot
3. Set Down Servant
4. Standin in de Need o' Prayer
5. Keep in the Middle of the Road
6. Oh, Lond, Ah got mo trubble
7. Soon Ah Will Be Done

Negro Spirituals について

黒人霊歌については今さら多くの説明は要しないと思う。アフリカ各地から奴隷として連れてこられた黒人達が束縛された生活のうちにキリスト教という光明を見い出した結果の彼らの祈りの歌を私達は黒人霊歌と呼ぶ。つまり言い換えるならば、黒人霊歌とは彼らの宗教歌でもあり、同時に彼らに苛酷な労働を強いるところの奴隷制度に対する戦いの歌でもあった。

人類の過去の歴史において、ある種の間人達が他の人種によって、恰も牛馬の如くに酷使され、虐待され続けた哀しい時代が確かにあったことを私達は知っている。そして、この悲惨な人種に属したアフリカ黒人達は、私達の理解の遠く及ばない深淵な魂を彼らの霊歌に秘めて歌ったのであった。しかしまた、私達は、あれ程に不運な生活を強いられた彼らの歌が屢々驚くばかり軽快で愉快であることを知る時、聊か訝らねばならない。恐らく彼らが霊歌をうたう時には彼らの現世的な虐待の日々も、忍耐も、苦悩も全て昇華され、まさにキリスト教の神の恵みの感激のみを覚えた。天国への悲願は、霊歌とともにいよいよ高揚していったのである。ドボルザークをして「アメリカの民俗音楽の中で最も美しい個性に富む音楽は黒人霊歌である」と言わしめたのは、この彼らの神聖な魂の歌であった。

1. 夕 暮

2. 雪と膝

3. 冬の夜道

4. 夏 草

男性合唱組曲「晩歌」のあとがきに、「家族への限らない愛や、家庭の暖かさが、にじみ出ている津村信夫氏の詩、そんなあたりまえの美しさに一児の母であった私は魅せられて一」とある。確かに家庭、家と云うのは、私達の精神世界の主要な核であろう。或いはノスタルジックな心の安らぎの場であるかも知れないし、或いは近親憎悪を醸酵させる場であるかも知れない。決して単なる愛や暖かさの象徴だけではない様に思われる。作曲者自身の後書にもかかわらず、歌ってみると不安定な、そして不安な真黒な深淵を視ている様な気がする。女である作曲者が、家族及いは家庭と云うものをモチーフとして、しかも男性の声の為の作品を創ると云う事は、何かその中に作曲者の家庭に対するイメージを理解する鍵になる様な気もする。

〈雪 と 膝〉

雪の日 姉は膝をだいて
私の瞳になにを読んだか。
お前は恋をしたのだろう。
あわただしく落葉のように
あわただしく
私は手紙をしたためる。
雪の日の街に出る。赤いポスト。
落葉の上に行く、舗道の上に行く。
鳴らないピアノ。舗道のピアノ。
マドリガル、私のマドリガル
火のつかない私のたばこ、
(海峡を見たか、あれから
私は海峡を、見たはたして。)
雪が来る。雪が来る。
雪はタイムの上にとまる。

〈冬 の 夜 道〉

冬の夜道を1人の男が帰ってゆく
はげしい仕事をする人だ
その疲れきった足どりが
そっくり それを 表はしてゐる
月夜であった 小砂利を踏んで
やがて一軒の家の前に 立ちどまった
それからゆっくり格子戸を開けた
「お帰りなさい」
土間に灯が洩れて 女の人の声がした
すると それに続いて
何処か 部屋の隅から
一つの小さな声が云った 又一个
また一つ別の小さな声が叫んだ
「お帰りなさい」
冬の夜道は 月が出て随分とあかるかった
それにもまして ゆきずりの私の心には
明るい一本の蠟燭が燃えてゐた

指揮者 高 島 志 信

組 曲 「わが歳月」

作詞	阪	田	寛	夫
作曲	大	中		恩
指揮	小	寺		隆

この組曲は大中恩氏が同志社大グリークラブ60周年を記念して贈ったものです。この、組曲は1年、12ヶ月の偶数月を取り上げて6曲で構成されています。作詞者、阪田寛夫氏は大阪出身の人で、大変興味深い詩を数多く発表され、大中、阪田両氏のコンビによる歌も数多くあるようです。

この「わが歳月」はテーマと語感がぴったりあっているので詩の語りも音楽もそのまま素直に語っているという部分が自然に多くなっています。この組曲は薄暗い感じのもの、軽快なもの、ユーモラスなもの、その内容は変化に富み、味わいのある曲ばかりです。しかしそれらの曲の底には若者の虐無と絶望がうたいこまれてあります。

1. 我が二月

歩みきて
ラーメン屋台の裏露地に
シャム猫の首ころがれり
ひげ長き首をけとばせば
青白き火花ばちばち
とぶかと見えて
かさ、とくだけぬ
風吹き星落つ
我が二月

3. 空 谷

しめやかな5月は去り
はや6月 潮は満ち
河辺に寄せる漣に
業深き地球の、今なお
廻りつゝあるを知る
ビルに棲む処女たちの白き腕は
余命なき夏の蝶
電線をゆすぶり、遠き山をゆすぶり
自らの重みに屈しつゝ
満員電車は走る
あわれ6月の都大路は砂漠にて
処女の腋毛は死せる草
象たちよ
隊伍を組み、空谷を歩め
犀歩め

6. 音立てて

音を立て、
今年が崩れて行く
もうあと少しで
のぼりつめるところだったのに
月と日が崩れ
明日と昨日が崩れ
がらがらと音立て、崩れ
瓦礫の街を
おれは走る
走る

Sea Shanties

シー・シャンティーズは、海の歌ですが、海辺に立々ずんで歌うロマンチックな歌ではありません。太洋を長い日々に渡って航海する舟乗り、海に生きる男達の歌です。

自然の偉大さを端的に示す海、この海に挑む男達には、血と汗の重労働が科せられる。帆を巻き上げる綱引き歌、錨の巻き上げや、ろくろを使って船を栈橋に着ける綱を引っぱる作業歌の前帆を止める時の手操り歌、にその重労働たる海の男達の叫びが聞こえます。又仕事がない時、歌の専門家達が憩んでいる水夫達のために、ギターやバンジョーや号笛を伴奏にバラード風の歌を唱って楽しませた前甲板の歌 (foc stle shanty) もあります。

19世紀になってからも、この種の歌は増え続け、南北アメリカのバラードや、黒人の波止場人足の影響を受けたりズミックなものも、シー・シャンティーに加えられ、現在ではアメリカ民謡のひとつに数えられています。

1.A, roving

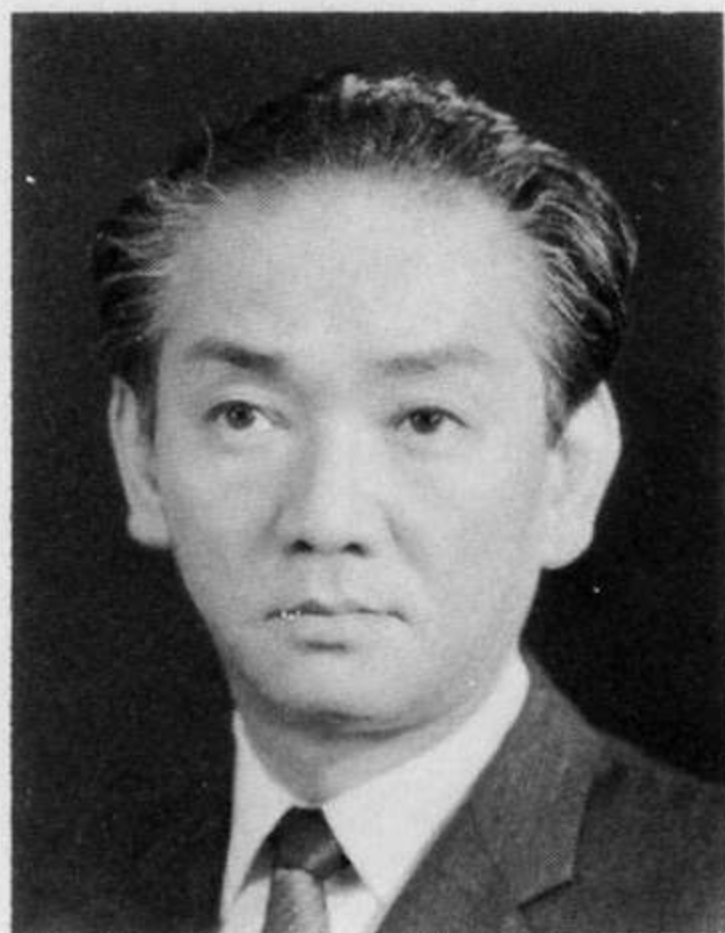
これも“ろくろ巻き歌”のひとつですが、歴史を追うともとはイングランドの海岸の歌のようでもあります。

2.Lowlands

スコットランドを発祥地とする“ろくろ巻き歌”で、孤独感が甘く旅する舟人のホームシックをさそいます。イギリスの典型的Capstan shantyです。

3.Whup ! Jamboree

舟乗りの故郷の民謡の影響を受けたものが多く、このfoc stle shantyはアイランドの民族舞曲を思わせるものです。



指揮者紹介

桜 井 吉 明

- 大正9年、大阪に生まれ、現在豊中に在住
- 松平信博氏、ウエストミンスター合唱大学前校長J・E・ウイリアム博士の指導を受ける。
- 大阪女学院短期大学講師・大阪大学男声合唱団技術顧問。

4-University Gleemen のひとり言

＜市 大＞ 云いたい放題に云いたい事

小生は我がクラブに於けるハーモニーの潰し屋である。大チョンボをやらかした覚えはないが、小生の思うごくごく小さなミスは、かなり我がクラブの品位を低からしめているであろう。出物腫れ物所嫌わずという言葉があるが、合唱に於かる所謂チョンボもそれであろう。まさに演奏会の頂点とも云うべき場面にいきなり顔を出して、全てを潰す。もっとも、それが出ずっぱりに出て、演奏会とは何ぞやというような深刻な問題を部員間に提起する場合もままあるようである。しかも、チョンボの当人が全く気付かず、我こそは正しい音なりという顔で歌っている事も多いから手に負えない。小生の場合、本人は潰し屋と自覚しているのだが、いざ歌うとなれば、そんな事は吹っ飛んで、ただ声を出し、その事に快感を覚えてがなりたてるのである。なまじ小さな声にするより、上達が早くて良いという先輩もいらっしゃるが、心の中では何とか上達してくれという涙ぐましき祈願をしていらっしゃるのだらうと、自分が原因でありながら、その先輩が可哀想になる位である。こと程左様に問題は当人にとっては深刻さがちっとも無いのだが、クラブにとってはやはり重大問題であろう。そこで今回こそは先輩をして嘆かさしめぬようにと、ひたすら？神頼みをしている小生である。何とか潰し屋から脱出してクラブの支えになるような声にと、努力もせずひたすら神頼み。ああ…………

＜外 大＞ 幸か不幸か？

四大学の女子の合格者数をサンデー毎日で調べると、外大は452人中174人、市大は1115人中231人、阪大は2121人中234人、府大は927人中26人。この数字を見て気づかれるのは、外大の女子の多さでしょう。このことは、男ばかりのグリーにとっては、大きな痛手です。最近、外大は女子に人気があり、3年前、女子の割合は約2割、それが今では約4割にまで達しています。これは、他の3大学にとってはうらやましいことではしょうが、外大グリーメンにとっては、喜んでよいことや、悲しんでよい事やら？

＜府 大＞ 歌と思い出

大学の門をくぐり、早や3年間の年月が流れ、小生も来春には卒業し、大学を去ろうとしている。思い出多き学生生活の中でも、グリーメンの小生には、歌の一つ一つに刻みこまれた“思い出”が一番である。1年の時初めてステージを踏んだときは、歌っていて足の震えが止まらなかった。（今宵の1年生もしかりかも --- 小生も又 --- ）又、信州の合宿では、女性がいなくてトンボと戯れた事等々、数多いが、中でも私が、足骨折の為、ギブスでステージを踏んだ事が一番記憶にある。リハーサルの始まる前迄は、ステージに立ことは断念していた私も、リハーサルが始まると、無性に歌いたくなり、ステージに立ったことは、今も脳裏に強く思い出として残っている。これ程、歌が学生生活に密着したものと感じた事はなかった。そして、今宵のステージも残り少ない学生生活の良き思い出となることだろう。

＜阪 大＞ パート紹介

〈トップテナー〉 中性部。最も高いパートを受けもつ。テナーとは言え。エンリコ＝カルーソーやデルモナコのような力強く張りのある声とは異なり、その音質はコントラルトもしくは児童合唱に近い。花びらのように薄い声帯を持つ、春なのにコスモスみたいな男の子の集団表面上は天使のような清純さを売りものにするもなぜか女たらしが多い。

〈セカンドテナー〉 男声高音部。トップに次ぐ高音部であるが、トップのように男を捨てきれない者によって構成される。セカンドの必要十分条件はバリトンよりも低い声が出ることと言われるようにその低音は定評があるが、その技量に溺れるあまり、さがるとなるとバリトンをけちらし、ベースにせまりトップの足を引っばることしばしば。そのためセカンドのパートリーダーは常にうわずるよう心がけねばならない。

〈バリトン〉 中声部。20世紀最大の名バリトンとの評判高いフィッシャーディスカウはイタリアもののオペラに出演すると、その技量のあまりの巧みさゆえに、他の歌手より浮き上がった一種の異質さを感じさせることがあると聞くが、阪大男声のバリトンも非常に個性の強いパートとして知られている。もっともその異質さの原因が他パートに比べて技量が高すぎるためか、はたまた低すぎるためかは定かでない。

〈ベース〉 通称低能部。阪大男声の看板パート。最も男らしいパートでその〇〇は太く長い。（〇〇の中には声帯を入れるのが正解）ベースの構成員は、自分達を人間とは考えていないらしい。オレはライオンだ、オレはトラだ、オレはゴリラだと自分に言いきかせているらしくて、その声は野獣の咆哮に近い。またこのパートは合唱バカの名産地としても知られ留年率が極めて高い。

大阪四大学のプロフィール

昭和37年1月、環境条件の類似した、地理的に近距離にあるこの大阪の四大学がお互いの交流を深めようという目的で、交歓演奏会を持つ事が決定されました。

第1回演奏会は、同年6月に毎日ホールで、第2回は翌年11月はサンケイホールで開かれました。しかし、この2回の演奏会では、その目的であった交流がなされず、また四大学の本質的な在り方の追求が欠けていたため、第3回演奏会は、中断せざるを得なくなりました。

その後、39年秋より、四大学の在り方、運営方針等に関する討論がなされました。その結果41年秋に「四大学は互いにその交流を深め、互いの合唱レベルの向上を図り、ひいては大阪府の合唱レベルの向上に寄与す」という目的が設定され、大阪四大学合唱連合規約が作られました。そして、運営面においては各大学委員20名からなる委員会が設置され、現在行なわれているような合議制、職務分担制が施されました。

このような方針に基づき、第3回演奏会が42年6月大阪大学中之島講堂で、つづいて翌年6月第4回演奏会が、今宵と同じこの文化ホールにおいて、開かれました。その間、互いの理解を深めるため、全団員によるジェネラルミーティング、演奏会後の合評会やゲネプロ等が行なわれました。

しかし、44年、大学紛争による演奏会中止は、再び活動の形式主義化、四大学の目的の形骸化に対する批判の生起する契機となりました。

その後、第5回・第6回・第7回と演奏会が持たれ、今日、こうして、第8回目を迎えることになりこれからも私達四大学の交流という、素晴らしい目的、それだけに、難かしいと思われる、目的に向って、邁進してゆくつもりです。

正 誤 表

頁	誤	正
3	指揮者 宮 内 隆 造	宮 田 菊 俊
5	指揮者 浜 名 猛	浜 名 猛 志
6	指揮者 高 島 志 信	小 寺 隆

<補 足>

5 頁 作 詞 津 村 信 夫
 作 曲 藤 原 三 千 代

